

## 子育てと保育

新山 裕之

空にのぼったお月さま

「今夜はお月さま出てるかな？」二人の息子がけんかをしたり、我まをいって泣き止まない時など、そう声をかけてベランダに出てみる。赤ん坊の時から雲や月を見せてきたのでお月さまが大好きな子たちである。

ある日、長男が「おつきさまには、めはあるけどあしはないんだよ」とつぶやいた。「どうして？」と聞くと、「あのね、ざりがにに切られちゃったの」と続け、そして：

『むかし、むかし、森にお月さまとうさぎが住んでいました。ある日、ふたりは川へ遊びに出かけました。楽しく遊んでいるうちにお月さまはうっかり、ざりがにをふんづけてしまいました。おこったざりがにはお月さまの足をチョッキン！おどろいたお月さまはうさぎと一緒にビヨーンと空まで飛びあがってしまいました。下に降りて、またざりがにに足を切られ

ては大変と、お月さまはそれからずっと空の上で、うさぎと一緒にくらしているんだとさ』

月をながめながらおしゃべりをするうちに、こんな話ができあがり、我家の小さな絵本になっている。

### 時間を共にする

職任が接近している私は、子どもと一緒に過せる時間が長い。この幸せを最大限生かして、今、自然の中で子どもと遊ぶことを楽しんでいく。散歩しながら歌をうたい、道端のねこじやらしで毛虫を作り、おおほこで草ずもう。どんぐりや木の実を拾って帰り、ゲームや楽器にし、草むらでつかまえたバッタやおろぎも飼っている。

土・水・草・太陽と大の仲良しの息子たちは、毎日泥だらけになりながら、高価なおもちゃでは体験できない貴重な体験を積み重ねているところである。私自身も息子たちと時間を共にし、同じ

物を見、一緒に感動し、楽しむことができている。

さて、家庭における父親の存在感の薄さが子どもの成長・発達に芳しくない影響を与えているのではないか、という指摘がされている。

私の身近でも、会社勤めの父親は、夜寝るだけに帰ってきて、子どもと顔も会わずにまた出勤するという家庭が少なくない。「私一人で育てているようなものよ」とお母さんは諦め顔だが、叱るべき時にビシッ！と叱る父親がいないために、けじめがつかなくなる子もいる。また、父親とのふれ合いを少しでもふやそうとするあまり、子どもが夜遅くまで起きていて、翌朝は食事もとらずに学校へ出かけるという話も珍しい事ではなくなってきた。

様々な仕事があり、家庭があり、子育てには、こうではなくてはいけないという答えはないのだ

が、できる範囲の中で、しわ寄せが子どもに及ばないように最善の方法を考えてほしいと願っている。

時間を共有できない分をお金で補おうとし高価なおもちゃを与えることもあるかも知れないが、時間を共にし、共に感じ、共に遊ぼうという努力をしてほしいのである。

### おしろい花

家庭においても、喜びや悲しみを共有していくことで、本当の親子関係が成立していくと思われ。そして、全く同じことが幼稚園においても言えるのである。子ども達は教師との信頼関係を基盤に自分を出すようになる。しかし、一人一人が家庭で見せている自分を幼稚園の中で十分にさらけ出すことはそう容易なことではない。

固いからに閉じ籠もってしまう子もいる。そんな時、からを割ろうと押したり、たたいたり、無

理な力を加えるとかえってかたくなってしまふ。万策尽きて、肩の力を抜き、そのからにそっと手を置き、その手のぬくもりが伝わったとき、からは自らはがれ落ちていくことが多いものである。

R子は、私が新採の時に受けもったクラスの女の子である。利発な子だが、集団になじむのにずい分時間がかかった。入園当初より自分から遊びを見つけて動くことができず、私から遊びに誘っても乗ってこない。時々登園をいやがり、正門前で母親から離れるのにひと騒ぎということもあつた。

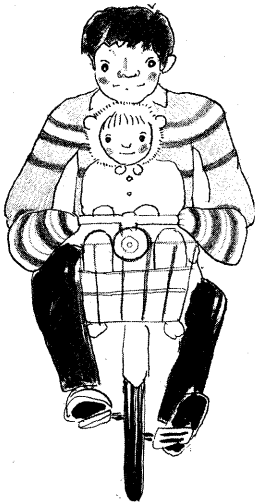
その日も、園内には入ったものの、保育室には入ろうとしない。私もそれまでは焦って何とか遊ばせようとして、あまり効果がなかったので、半ば諦め、今日はのんびりやろうという気持ちになつていた。

庭の隅に、赤や黄色のおしろい花が咲いていた。「ほら、花のあとに種ができていますよ」と私

は言いながら、種とりをはじめた。毎年こぼれた種から大きくなるおしろい花はたくさんの花と種をつけている。夢中になって私がつっていると、いつの間にかR子も手にいっぱい黒い種をにぎりしめていた。にこっと笑って、何となくはにかみながら…。

私、かけっこしたくない

先日、私のクラスに実習生を受け入れた。ある日、部分実習でリレーをすることになり、実習生が子ども達を誘い出した。H子は体が小さいために走るのが遅いと思いついでおり、やりたくないと言いつ出した。しばらく様子を見てから、私が誘ってみた。「○○ちゃんと一緒に走ったら楽しいだろうね。遅くなんかないよ、走ってみなくちゃわからないよ、とりあえず行ってみよう」という調子で何とかリレーの中に入った。そして、走り出したH子には友達もまじえて精一杯の応援を、



走り終えた時には抱きかかえ、頭をなでてめいっばいほめてあげた。保育室に戻る前に私が狼になって追いかけてこをして、またひと走りした頃には、すっかり走ることを楽しんだ笑顔になっていた。

その日の帰り、H子は大急ぎで母親のところへかけ寄り、「かけっこで一杯走ったんだよ、おもしろかったんだよ。」とうれしそうに話していた。

大事なのは、リレーをすることではなく、H子が、走ることに、みんなと一緒に体を動かすことの楽しさを感じとったことである。H子はその後の運動会でも元氣一杯走り、大勢の前で立派に司会をし、大いに自己發揮をしたといえる。「遅いかも知れないが自分をさらけ出して走ってみた。そうしたらみんなが応援し、認めてくれた。そして楽しかった。」それがH子の自信となったのだから。

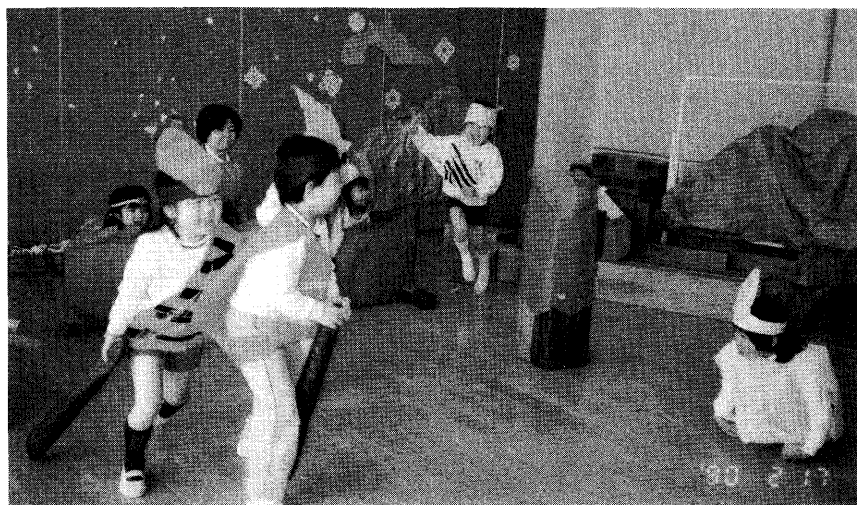
H子の事例は、子どもとは？ 指導のあり方とは？ という実習生の疑問と私の悩みにひとつの答えを与えてくれたのである。

おもちが逃げた

子どもたちが作り出す遊びも、それを教師がどう受けとめていくかによって、遊びの方向性や楽しさの度合いも大きく変わってくる。

一月、子ども達は何か新しい遊びを探っている様子で、遊びが停滞していた。私自身も何か物足りなさを感じて焦っていた。そしてその停滞をのり越えるきっかけとして、弁当の後、私が絵をかいた。先日やったもちつきもちつきの絵である。かきながら集まってきた子ども達の言葉とイメージを加えながら、鬼がついたおもちが逃げ出し、森の動物にかくまってもらいながら逃げるといってお話お話ができた。

この話をベースに男児が楽しんでいた宇宙船ごっこを組み込んで簡単な歌や衣装やお面などを少しずつ作りながら劇遊びをした。リズムカルなくり返しのせりふを考えていったことで、ふだん口数の少ない子どもも鬼などになりきって演じていた。役を交替して、毎日のように繰り返し、お



▲写真1 白いおもちの役や、赤や青の鬼の役を演じる。

母さん達にも見てもらった。

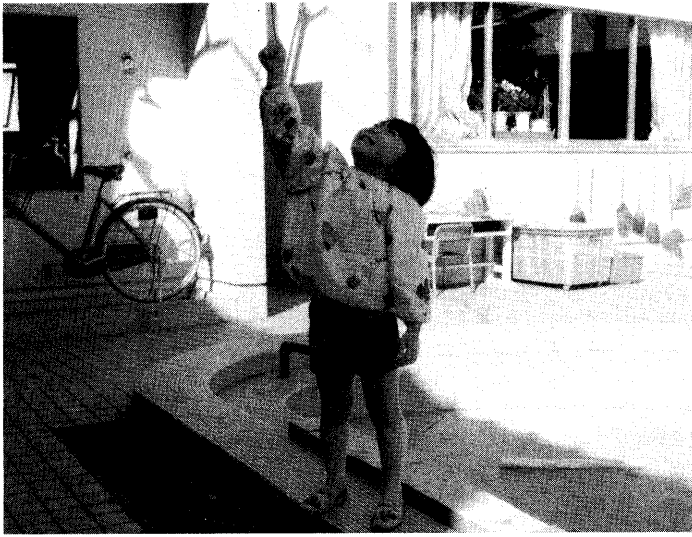
自分達の身近な経験を自分達でお話にして作り上げていったことで、それまでくすぶっていたものがポツと燃え、楽しさを味わえたのだと思う。そして、私自身が楽しみながら保育をしていたことも忘れてはならない事実である。

どんぐりと高価なおもちゃ

「おもちが逃げた」の劇遊びは子ども達にとっても、教師にとっても、自分達で作り出したという点がその楽しさをより大きくしていったといえる。既成のお話ではない分、劇として形を整えていく段階やせりふなど、ずい分智恵を絞った。大変ではあったが、終わった後に味わった満足感や得たものは格別なものだった。

高価なおもちゃは最初は興味をひくだろうが、林の中で拾ったどんぐりとダンボールでコリントゲームを作って遊ぶ時のわくわくする気持ち、ど

◀写真2 柳の枝に届いた。



んなゲームにしようかなと考える楽しさは味わえない。

子どもが本当に目を輝かせて遊ぶのは、高価なおもちゃよりもどنگりのゲームの方だと思う。そこには自分の手で創造するという作業があるから。そして、それは、私自身にとっても同じことなのである。

プールのわきの柳の枝をつかまえたN男くんは、上を見上げてとてもうれしそうである。届くはずのない高い木がもうちょっとのところまで降りてきてくれた。少し背伸びをしたら手が届いた。ただそれだけの一瞬のでき事だったが、私はこの写真を見るたびに、N男くんのような笑顔で、もう一段高い自分を目指して、チャレンジする心を忘れまいと自分に言いきかせている。

(練馬区立北大泉幼稚園)